

波照間島の漁業

野原全勝

1) 島の漁業の特徴

古くから糸満系漁民は奄美諸島をはじめ、琉球列島各地に活躍し、現在でも各地に定住し、漁業は、これらの人びとの専業によって営まれているのが普通である。しかし、この島の場合、島民みずからが漁業に従事しているのが特徴である。また、専業化がすすまず、かつお漁の盛んであったひとところを除けば、自給自足経営であることも特徴の一つである。筆者が島を訪れた昭和56年8月には、専業者は5人で、うち新城清喜氏のみが島内消費向けで、他の4人は石垣へ陸揚げしているときいた。

『波照間漁港概要』（昭和56、7、21、竹富町）によると、漁業経営体25体、従事者41人とあるが、上記専業者5人を除けば、36人は兼業者ということになる。

島のまわりは珊瑚礁の浅瀬に囲まれており、その外は黒潮である。したがって、島の周辺は礁の魚類や貝類が豊富で、さらに回遊魚のカツオ・マグロ・トビ魚の好漁場である。島びとは自給自足的経済秩序に適合しただれもが農業の余暇を利用してできるイサリ、銛突、いそ釣、追い込み、曳縄、底づりといった従来の漁法を採用している。

2) かつお漁業の衰退と漁業合併

以上は、島民の自給自足的経済に密着した従来の、そして現在おこなわれている漁業であるが、大正初期に導入され、昭和3年から昭和36年ごろまで栄え、そして昭和48年を期して消滅していったかつお漁業は、この島最大の商品生産であった。

波照間島のかつお漁業の盛衰の経緯については『波照間島民俗誌』（宮良高弘著 S47・6・25）『波照間島』（加屋本正一著 S53・10・1）などに紹介されている。

明治43年ごろ波照間島周辺を操業中の糸満漁船が波照間青年7人を雇用し、青年たちは2年の間に技術を修得した。さらに、すでにかつお漁業が盛んであった与那国島で研修をつみ、大正元年に石垣島で帆船を建造させた。これが波照間島民によるかつお漁業のはじまりである。

大正3年に北部落で、追って前部落で帆船を建造した。

大正9年には、銘苅用弘氏を中心に前・南・名石の三部落共同で石垣島の新川に納屋を建て、また、仲本信幸氏を中心に外・北部落共同の組合をつくり小浜島の細崎に納屋を建て、それぞれ20馬力の発動機船を購入してかつお節を製造した。

大正13年には、波照間漁業組合は、専用漁業権を取得し、漁船も次第に改善された。その後珊瑚礁の多い波照間島の海岸に、幾多の困難を克服しながら発動機船を接岸させ、これまで小

浜島や石垣島においてあった納屋も波照間島に移転させ、かつお節生産は軌道にのるようになった。

運営面でも、部落民の共同出資、共同作業という島特異の形態は、他の注目をあびた。

昭和3年ごろには、組合は再び部落単位に再組織され、生産は本格化した。生産の拡大は農耕に影響をあたえる程になり、きびの夏植えをおくらせるなどの工夫がなされ、夏のかつお業冬の農業（きび）という半農半漁の形態を定着させた。

波照間島でかつお漁業が盛んにおこなわれたのは昭和3年から昭和36年の33年間である。戦争中一時中断されたが戦後間もなく復活され、昭和28年～30年ごろに戦後の最盛期をむかえ、漁船の数も8隻をかぞえ10工場でかつお節の加工をおこなっている。その後やや後退するが、それでも昭和36年ごろには部落単位共同船4隻と個人所有2隻（いずれも15t～20t未満）が操業している。

さて、このようにして導入され、発展したかつお業も、昭和36年ごろから衰退期に入り、昭和48年には、完全に消滅してしまった。はたしてその原因は何であったろうか。昭和48年3月15日、島ごとの漁協が合併されて八重山漁協が設立されるが、合併前に波照間、竹富、小浜などは自然消滅している。このように、波照間のかつお漁と漁協の動向は運命を共にしたのであるが、そこらの事情をあきらかにしたい、というのが本調査のねらいの一つであった。

以下は、現地での聞きとりをまとめたものである。

<浦仲浩氏（公民館長、元かつお船機関長）のはなし>

最盛期は、昭和8～12年ごろ。工場が8つあったし、船も10隻ほどあった。戦後も再開されて、7～8隻で操業した。昭和30前後がよかったと思う。それからだんだん事業の不振があらわれ、とくに昭和45年ごろには漁協も事実上消滅していた。

原因は、かつお業の不振ですよ。漁協は、かつお漁協でもっていたわけで、かつお漁業の不振は、直接漁協の壊滅につながったわけです。かつお漁業の不振の原因ですか。

それは、第1に、エサとりの費用の高騰ですね。小浜島や竹富島、黒島あたりでジャク（小魚）をとるのですが、専門家（糸満系漁師）の労賃が彼らのいいなりでした。われわれは潜れないし、完全にこちらの足元がみすかされていて……。

第2に、港の不備があげられる。1年に2～3回やってくる台風で、確実に船は損傷を受けた。

第3に、化学調味料だしの素などの普及でかつお節の値が悪くなったことです。

第4に、若者の流出。

第5に、キビ生産の本格化と、労働力の調達が困難になったこと。

第6に、石油の不足（配給＋ヤミ）。

第7に、その結果でもあるが、技術者が他の船（石垣あたり）に乗る者（引きぬき）も出た。

<勝連文雄氏（民宿経営、元区長）のはなし>

私が軍隊に入隊したのが昭和12年ですが、そのころはかつお漁業が盛んで、入隊前は半人前

でしたが配当300円あった。当時は1,000円で家1軒建ったものです。

漁協の消滅の原因について……、1にも2にも、かつお漁業の不振です。製糖工場の大型化は、かつお漁業の不振から島民を救うものとして出てきたのであって、けっして製糖工場の大型化がかつお漁業をつぶしたのではありませんよ。ただ後になって、労働力を必要としたことが逆に作用するという面は出ていた。

かつお漁業の不振の原因は、第1に、一般物価の上昇にもかかわらずかつお節の値段が上がらない、というアンバランスが最大の原因です。

第2に、エサとりの人件費の高騰。

第3に、石油の値上りと不足（配給）。

第4に、若者の流出。

そのほかにもあると思いますが、以上が主な原因といえましょう。すべての状況が悪かった。今だからいえるが（時効）、中城湾に米軍のタンカーが座礁したとき、船団を組んで油をとりに行きました。いけすを満たんにし、ドラムカンも持っていき満たんにして帰りました。それ程油不足でした。

〈仲間栄三氏（最後のかつお業個人経営者の一人）のはなし〉

私がかつお漁業をはじめたのは、共同船がだめになり、漁協も事実上解体しつつあった時期に、もったいない、ということでやりました。3年はやっともちました。4年目が昭和47年で台風で船が損傷したことと、復帰後の経済情勢が不安で、鹿児島に調査にでかけました。内地の業者の状況を見て、もうだめだ、と思いやめました。

理由は、内地の場合資本投下をし、工場は機械化され、冷凍設備も充分だし、コストがかからなくてすむ。われわれは、明治時代と何も変らないし、人手が頼りです。内地のようにとはとうてい設備も個人ではどうにもならないことがわかり、廃業しました。

波照間島のかつお漁の困難になった理由は、なんといっても人手が従来のように充分でないことです。以前は組合でしたので、皆株主だから、きびの作つけを強制的におくらせて大動員がかけられたが、時代が時代、大切な漁期に船員があつまらないとか、加工処理も人手が集まらない時があいつぎ、魚を腐らしてしまうなど、さんざんでしたよ。大漁のときは、2隻で7t～10t水揚げします。当時は、船着場や冷凍設備もありませんから、沖に船をとめててんま船で何往復もして陸揚げするのです。処理加工には、100人以上の人手がいる場合だってあるわけです。1日で処理しないといけません。これが大変な事業ですよ。

かつおの値段も問題がないわけではありませんが、まず人手不足が最大の原因です。共同船の場合だって組合員（株主）のきびの作付を半強制的におくらせて最大動員をかけることが困難になったところに衰退の真因があった、と私は思いますね。だから製糖工場の大型化と複雑に関連していると思います。

第2の原因は、船着場の不備なことです。台風がくれば、船はかならず破損します。これは漁民にとって大変なことです。

この二つの原因が克服されれば、漁場は目の前にあるので再開も可能だと思います。私のあとに4～5名で組をつくり操業したが1年程で失敗しています。値段の問題は何とかなると思いますよ。組合だって黒字解散だったことからあきらかです。問題は、組織内部の共同体が崩壊しつつあることで、これは時代の流れでしょう。漁に出る人は出て、出ない人は出ない、という不公平がでて、けんかすることもあった。キビの植え付けがあるとか何とかいって、1人去り、2人去り、だんだん労働力の集中が困難になったのです。だからもしかとお漁業をやるとすれば、処理施設、冷凍施設など、人力のみにたよらない方途をとる必要があると思いませんね。

<波照間徹氏（製糖工場長、元漁協長）のはなし>

戦前は、大正末期に本格化し、最盛期は昭和10～15年ごろです。12～13t級の漁船が6隻あり工場も1漁船1工場の割でした。人員の規模は、1隻に船員20人で120人位。漁によってちがいがあがるが、1工場には男5人、女15人位計20人位で、やはり120人位働いていたようです。配当もよくて、1漁期(4ヶ月)1人200円は下らないという状態でしたから、波照間の経済は、かつお業でもっていたわけです。

戦後は、徴用された船もかえり、また新建造されたのも加わってさっそく復活し、昭和28年ごろには8隻が操業しています。群島政府時代は漁業会、その後漁業協同組合として発展し、戦前をしのぐ程でした。しかし、漁業権に対する制度や考え方にも変化があり、専用漁業権から共同漁業権へと拡大され、昭和35～36年にはかつお漁が少なくなった。昭和28年の8隻から昭和35年の6隻、昭和38年の5隻、昭和42年の3隻、昭和48年の1隻、昭和49年0という数字がこの間の事情をものがたっている。

このようなかつお漁の不振の原因は、いろいろあるが、第1に、港がないことや冷凍施設の皆無なことなど。台風による漁船の損傷はひどく、ドック入りすればその年は出漁できない。また冷凍施設がないことで豊漁時の加工処理が困難。

第2に、若者の都会への流出。従来は、共同体意識に支えられて、不利な条件の下でも生産に従事していたが、これら共同体に対する意識の変化などから、第1にあげた不利な条件に対する不満となり島を出ていくものが続出した。

第3に、エサ代の増大。漁場は近いがエサ場が遠い。石垣のかつお漁業者に比べて不利な面が多かった。エサとり業者(石垣の糸満漁民)の賃金が高いこと。

昭和36年には、このようなかつお漁業の不振を克服するには、従来のきび作を本格的なものにすることが必要となり、各部落に散在していた30t工場を補助で100tの大型工場へと改変した。これにより、夏は海(かつお)、冬は製糖のローテーションできりぬける道を歩んだ。結局は、かつお漁は音をたてて衰退し、漁業は自給自足的に営まれる程度になった。

昭和48年3月15日八重山漁業協同組合が設立されるが、そのころには、八重郡内の各単位漁協は、事実上解体していたので、石垣漁協に吸収される形で八重山漁協はできたのが真相である。竹富、小浜、はとま、はてるまの順で解散し、与那国と西表は残っていた。

以上、浦仲・勝連・仲間・波照間の各氏のかつお漁業についてのききとりを紹介した。このほかに、区長の東迎正夫氏、加屋本正一氏（『波照間島』の著者）からも貴重な御意見をいただいた。内容的には上記の方々とほぼ一致している。

これらをここでまとめてみると大略次のようになろう。

- 1、若者の流出がはげしく、必要な労働力の動員が困難になった。
- 2、漁港の不備により台風時に珊瑚礁に船舶がたたきつけられ、損傷がひどい。その年は使用不能。
- 3、冷凍設備の皆無、処理加工の時間的調整が不可能なため、省力化が困難。
- 4、エサ代の値上り。
- 5、石油の値上り。
- 6、一般物価の値上りとかつお節価格の不つきあい。
- 7、かつお節代替品の出まわり。

以上のうち4～7までの要因は、一般的なもので、ひとり波照間島だけのものではない。しかし、波照間島のような離れ小島が受ける影響は、ひとしおであり、立地のよい地域とは大分ちがうと思われる。

1の問題は、部落共同体の強いきづなで結ばれていた共同体意識に変化があらわれ、それが一挙にふきだした。漁協の組織内部でも矛盾、対立がはげしくなる。

2と3は、波照間島のような絶海の孤島で珊瑚礁独得の不利な側面であり、経済的にも決定的である。

3) 島の漁業振興の基本方向

これまでみてきたような経緯を経て、大正・昭和と島の経済に寄与してきたかつお漁業は発展し、そして衰退した。

さて、現状はどうであろうか。先にみたように、かつお1本づりは全くなく、かつて島の大半の300家族が有していた漁協組合員の資格も、今では10人前後になっている。実質は5人である。しかも、島を拠点に、専業漁業をおこなっているのは、新城清喜氏唯一人で、他の4人は石垣が水揚げの拠点である。

関係者全員がかつお漁業衰退の原因にあげていたのが漁港の不整備である。行政へかねてから要請し、住民永年の懸案であった波照間漁港は、筆者がこの島を訪れた2週間前の昭和56年7月21日に完成し、港びらきがおこなわれた。しかし、それを最も必要としていたかつお漁業の時代が去ること10年、というのも皮肉なことである。何はともあれ、第四種漁港の完成は、島の人々にとって、生活港として、あるいは、漁業再興の夢を実現させるものとして、可能性をひめているのである。

県や町のこの漁港の位置づけは、①沿岸漁業の振興、②島の沖合で操業される県内外船の休憩・避難港、③農産物の搬出港、④生活用物資の搬入港である。

現在、この港にある漁船は、3 t未満、1 t未満の小型動力船で、専業の5人を合わせて29隻。兼業者のほとんどが自給のための操業である。

現在、専業として活躍している漁民の一人新城清喜氏のききとりを紹介しよう。

<新城清喜氏（専業漁民）のはなし>

従来、私も皆さんといっしょにかつお船に乗っていたが、それがつぶれてからは、小型船でルアをつかって操業している。私の場合 1.5 tの1人乗りで、かつおの時期は曳縄でかつおを中心にやっています。たまにサワラも揚がる。でもほとんどかつおです。他の4人の専業者は深海一本づり（底づり）で、赤マチなどっています。ほとんど直接石垣へ水揚げしている。私は専業ですが、民宿の人やサラリーマンも曳縄でかつおを揚げています。

とれたかつおは、私の場合島の人に売ってるが、残りは冷凍もしますが、ほとんどねり（かまぼこの原料）にします。かまぼこも作っています。このように加工をはじめたのは3年ほど前からです。

今、専業でやっている5人は皆30代と40代です。5人とも現在は一応それぞれ安定しています。漁場としては最高の場所です。かつおが済めば底づりがあるし、石垣あたりの船もみなここにきます。3～6月はとびうお、6～9月がかつお、9月以降はまぐろ（但し、仕かけが大きいので私はやらない）、マチ類は年中、と可能性は大いにあります。

（筆者——かつお船のつぶれた最大の理由の一つに、漁港と関連施設の不備があったがこれが解決したわけです。将来の、この漁港をつかっての展望はどうか）。

10年前にできていたらかつお船も残っていたでしょう。だからといって、今すぐかつお船とはいかないのでは……。でも若人達のことを考えると何とかやりたいですね。エサとりと石油、流通問題を考えるとよほどめん密に計画しないと、ひどいめにあいますよ。ですから、昔立地したからといってかつお船のみが港を活用する道だ、と固定的に考えない方がよいのではないのでしょうか。

数は少ないながら、私たち5人は今のところ安定しています。島の自給はできているし、問題は、他の島より人口流出は少ないわけですが、確実に過疎化は進んでいるので、将来的には何とか今の状態からスタートし、更に発展させることが必要だと思います。といっても拡大すると不安ばかりですよ。

（筆者——新城さんの営業形態をもうすこしくわしくー）。

日によってちがいますが、朝早く海に出て10時には帰ります。かまぼこ加工やねり造りをして、午後3時ごろ出かけて夕方帰る、というのが最高のときです。1日1回が多い。天気がかげれそうなきは、2回も続けることがあります。5 t位の冷凍庫をもっているので鮮魚として貯蔵し残りは加工しています。

かまぼこですが、色は見ての通りよくありませんが、味は最高です。何しろ90%かつおですから。第2の特徴は、一旦冷凍すれば、2～3ヶ月も全く味が変わりません。それに安いですよ。波照間では、昔から自家用として作りましたが、石垣にも沖縄にもないはずですよ。

鮮魚も、ねりも、かまぼこも島の人が買いに来ます。今のところこれで充分食っていただけますので、拡大は考えていません。将来はわからないが……。

島の漁業の今後について、前に登場した波照間徹氏（現製糖工場長、元漁協組合長）にきいてみた。

<波照間徹氏のはなし>

漁協の組合員も減りました。先も話したとおり、漁協はかつお漁業でもっていたわけですから、今では、組合員資格者は専業、兼業あわせて10名前後です。実際に専業しているのは5名で、新城氏だけが島に水揚げしている。島には29隻の小型動力船がありますが5人をのぞけばみな、農家やサラリーマン・自営業者です。うちの職員（製糖工場）も、5時あと海に出て、かつおの20～30キロは曳縄で揚げていますよ。

港もできたし、今、私たちが考えていることは、昔のような大がかりなものは別に考えるとして、漁協の組合員でないような副業的な兼業者を組織することです。きびは12月から3月までですから、そのあとは何もない。農家の一部は畜産とかいろいろあると思うが、そうでない人たちは組織できると思います。

一本づりでなくても島の周辺のかつお漁は曳縄で可能です。今、専業者も兼業者も含めて漁船組合というのがつくられています。皆個人の小型船でかつおをとって、加工を協同加工場で処理するというささやかなものを考えています。あるいは、鮮魚のまま冷凍して石垣または那覇、ないしは東京へと販売機構を上手に使うということです。かまぼこ加工なども考えられます。でも手はじめに、製氷設備を作ることが先決ですからそれをいま計画中です。

今度できた漁港は、実は昭和25～26年頃から行政に要請して、30年目にしてやっとできました。できたときは、かつお船は1隻もない、というわけです。せっかく実現したからには、また、せっかく漁場にもめぐまれているからには、活用しないわけにはまいりません。きびだけでは、農家だって大変です。やっていけませんしね。島を出た若者も、別の土地の人でも所得があがり、生活環境がよくなれば、帰ってくるし、新らしく入っても来ると思います。

かまぼこにしろ、鮮魚にしろ、かつお節にしろ、現在の業者（新城さんなど）を圧迫することのないよう、むしろ彼等も含めて発展するように身近かなところから切り拓く以外に道はないと思いますよ。現にかまぼこは需要を満たしきれない状態です。

今、おはなししたことは、単なる夢ではありません。現に、漁船組合はつくられています。今29隻の小型船があり、わたしが組合長をしています。みんなで話しあっています。今年は船揚機と製氷施設を設けることを計画しています。あまり大きなことは考えていません。でも、できるところからやってみたいです。

4) 調査を終えて

琉球弧の最南端、台湾とならぶ緯度の、太平洋の黒潮にあらわれる絶海の孤島波照間島に、古く住みついた人たちが、台風や干ばつなど自然の脅威を受けながら肩をよせあうように村落をつくり、力をあわせなければ生きてゆけない、というきびしい条件の中から人びとの共同体意識は強固なものとなったであろうことは、容易に理解できる。

自給自足の経済社会に、最初の商品生産をもたらしたのが、糸満漁船員に手ほどかれたかつお業であった。一たん導入されたかつお業は、島の独特な共同体意識に支えられて、大正・昭和期に著しい展開を示した。とはいえ生産条件の中には珊瑚礁の島という港のない不利な側面があったわけで、悪戦苦闘のあけくれであった。昭和30年代に入って商品経済を通じて包含され、拡大された経済は、さまざまな形で島の経済をゆり動かし、具体的には、かつお漁業の消滅という形で、基本的には、共同体の変容という、一大試練を受けてきた。あるときは自然の脅威にたえ、また、あるときは社会の進展にとまどいながら、生きる術をまさぐって共に生きていく、というしたたかさをこの人たちはもっている。

とはいえ他の離島と共通のなやみの一つとして過疎化がある。それは、着実に進んでいる。島の人びとの自主的な活力を引きだし、発展を保障するのは行政である。本調査でつくづくこのことが痛感させられた。この島の苦い経験の一つが、今年新設された漁港である。昭和25～6年ごろに要請した島人の切なる願いは、30年後に実現されたのである。ときすでにおそし、でかつお船の姿は全くみあたらない。

行政の対応に問題がある。住民の自主的な発展の芽をばすのが行政の最大の任務である。そのためには、住民要求を機敏に受けとめ、スピーディーに対応することなしには、離島対策は無意味である、ということを感じるべきである。